

## ズブズブ班

### ラオスのサイタニー郡における聞き取り調査：村落形成・移住史と塩生産 イサラ・ヤーナタン（名古屋大学大学院）

キーワード：ラオス、サイタニー郡、村落、歴史、移住、塩

調査期間と場所：2004年9月9－17日、2005年1月5－11日、2月23日－3月2日、サイタニー郡

#### General Survey in Xaythani District : History of Community Settlements and Salt Production

Isra Yanatan (Graduate School of Nagoya University)

Keywords: Laos, Xaythani District, Village, History, Migration, Salt

Research Periods and Site: 9-17 September 2004, 5-11 January and 23 February – 2 March 2005,  
Xaythani District

## 1. はじめに

2004年度は、サイタニー郡で3回にわたって聞き取り調査を実施した。調査は、以下の8か村で行なった。ドンクワイ Don Khwaay、フアシアン Hua Xiang、ターソムモー Thaa Som Moo、ドンマークカーイ Dong Maakkhaay、ポーンサイ Phone Xay、ポーンガム Phone Ngaam、パークサップ・マイ Paak Xapmay、ウドムポン Udom Phone

調査の目的は、1950年代まで遡って、サイタニー郡への移住についての情報を集めることであった。その調査に伴って、塩づくりに関する話も聞くことができた。

本稿では、実施した聞き取り調査から、特に平野部生態班（ズブズブ班）の今後の調査に資すると考えられる情報を含む四例を選んで、その内容の概要を提示したい。また、サイタニー郡への移住、および、それに伴う物々交換について、聞き取り調査の内容に基づいてまとめた結果を提示したい。

## 2. 聞き取り調査で得られた情報

### ドンクワイ村の女性のお年寄りへの聞き取り調査

インフォーマントの子供時代には、ドンクワイ村には70軒の家があった。子供時代に近くにあった村は、ドンルム Don Lum、(サーン) フアボー (Sang) Hua Boo、フアシアン (ガム) Hua Xiang (Ngaam)、シンマノー Sim Manoo、ドンクワイ村だった。(サーン) フワボー村は、ドンクワイ村からの分村だった。

インフォーマントの父親は区長(ターセンの長)だった。小さい時、父と一緒にヴィエンチャンの町の道をつくりに行った。ウィエンチャンまでは馬に乗って行った。

1966年に大洪水が起こった。それはメコン川の洪水だった。ドンクワイ村も洪水になった。

シンマノー村、マークヒヤウ Maak Hiew 村、ナーロン Naa Long 村などの南側の村の人が、ドンクワイ村に物を持って来て塩と交換していった。塩との交換のために持ってくるものは、魚、野菜、果物(みかん、パパイヤ、バナナ、サトウキビ)、カイ(シオグサ類植物)、ソムパー(なれずし)であった。交換比率は、魚の重さ1に対して塩の重さが4であった。

インフォーマントの子供時代、ドンクワイ村には井戸があったが、水が足りなかった。毎日何人か集まって、シンマノー村まで水を汲みに行っていた。水汲みはとても大変だった。

毎朝起きてから、まず米を搗いた（タムカオ tam khaaw）。それから水を汲みに行ってきた。それが終わったら、魚を獲りにいけるようになる。魚はマークヒヤウ川で取った。取れる魚は パー・コー Paa Koo、パー・スアム Paa Suam、パー・ドウック Paa Duk、パー・カーオ Paa Khaaw、パー・カイエン Paa Ka Yeng、パー・シウ Paa Siw、パー・ダープコーン Paa Daap Khong であった。パー・カーオは、パー・デーク Paa Daek（塩漬けにした魚に炒り米を加えて発酵させたもの）を作るために使う魚である。

#### ポーンガーム・ゾーン（第2ポーンガーム）村の副村長への聞き取り調査

ポーンガーム・ゾーン（第2ポーンガーム）村は、現在、128戸で人口は1040人である。この村は1970年に建てられた。ナムグム・ダムの北側の山に住んでいたモンHmong族が山から下りてきて、ここに村を建てた。最初は20家族いた。一家族あたり2ヘクタールの土地を政府からもらった。1985－6年から、平地に移住するラーオ・スーン（「高地の人」、ここではモン族のこと）が増えてきた。それは国の政策である。2001年に一部の村人は分村して、新しい村であるノンソンホン Nong Song Hong 村を立てた。分村の理由は、生産のための耕地が足りなかったからである。

この村は稲作を生業とするほか、モン族の布を織ってアメリカに輸出もしている。そのほか、家畜（豚、アヒル、牛）を飼育したり、野菜畑、とうもろこし畑などを作ったりもしている。

村人の親戚が移住してくると、自分の土地がまだないので親戚の耕地を借りて米を作る。そのほか、近所の村の森林＝ドン Dong を借りて、開墾して畑を作っている。

ノン・ワイ Nong Waay という大きな沼は、11村落が共有で使っている。面積は約5ヘクタールである。1995年に大洪水が起こった。

#### ターソムモー村の村長への聞き取り調査

この村は、1920年に建てられた。ウェンチャン近辺のソーク Soak 村から分村してきた。最初の段階では2－3軒しかなかった。そのあと東北タイから移住してきた人がいて、合計で8世帯になった。移住の理由は、グム川 Nam Ngum の魚を求めてであった。グム川はこの村の近くにある。魚を獲って米と交換した。村はだんだん大きくなってきて、20軒以上になった。現在は152世帯である。

この村では、1975年以降に水田の開墾が始まった。1982年に、集団での農業が始まった。成功しなかったので、2－3年たって廃止された。大きな米倉は、学校として使われるようになった。2004年から、日本の援助が始まった。学校を作るための金をもらった。現在は漁村ではなくなって、カリフラワー、小豆、サラダ菜などの換金作物の農業をしている。これらの農産物は、ターゴン Thaa Ngon の市場に、それぞれが自分で売りにいっている。

水田開墾の時に、日本からの援助があった。肥料を使い始めたのは、1983－4年のことであった。1ヘクタールあたり50キログラム（一袋）の肥料を使った。現在は、少なくとも250－300キロ（5－6袋）の肥料を使わなくてはならない。1986－7年に、灌漑用水路建設のプロジェクトが始まった。

土地の分配は、家族の人数によるが、だいたい一家族あたり1ヘクタールだった。

インフォーマントは、ボンサーリーで政府の仕事をしており、1985年に転勤でここに移住してきた。1989年に結婚した。大部分の村人は、サムヌアヤシエンクワンから移住してきた。

沼は村の共有である。灌漑用水路がなかった時代には、乾季には沼の水は流れ出してしまっていていなくなった。灌漑用水路ができると、用水路から沼に水が入ってくるので、年中水があるようになった。この村の共有の沼は3つある。村人は、自分が食べるために自由に魚を取ることができる。大きい沼としては、ノン・スワム Nong Swam が挙げられる。ノン・スワムは、集団農業が行なわれなくなったあと、ターソムモー村とケンカイ Kaeng Khay 村の共同管理下に置かれることになった。

グム川では、モン Mong を流して（モンという魚取りの大きな網を仕掛けて）魚を獲った。モンは大きいので一人で仕掛けることはできず、何人かで仕掛けなければならなかった。モンを流す前には川の掃除が必要で、人を雇って掃除をやってもらった。

現在は、資本を投下して、グム川で魚の養殖をする人がいる。

ターソムモー村では、毎年洪水が起こる。

#### ドンマークカーイ村の村長への聞き取り調査

この村は、1954年に建てられた。マークカーイ Maak Khaay とは木の名前で、このあたりにはその木がたくさんあったので、それが村の名前となった。村を建てたのは、タイのカラシン県から来た人たちだった。カラシンから30世帯が来て、ウィエンチャンに移住した。その中の6世帯が、生活していける土地を求めて、ここにやってきて村を建てたのである。(ウィエンチャンは、もともとカラシンの人が建てたという説もある)。現在、村には272軒ある。

この村の生業は、水稲耕作である。農閑期になると、村人は町で労働者として働く。例えば、建築現場、家具工場、縫製工場、靴製造工場で働く。それは1997-9年ぐらいに始まった。

自然の沼は3つある。ノン・デー Nong Daeng、ノン・ルン Nong Lung、ノン・ドゥー Nong Duu である。これらの沼では、村人は自由に魚を獲ることができる。人工の沼(ノン・スーム Nong Soem)もある。そこでは年に一回、魚を獲る。村人個人が村に金を払ってでそれぞれ魚を獲るか、一括して魚を獲る権利を売って村にお金が入るようにするか、会議を開いて決める。

以上、聞き取り調査で得られた情報のうち、四例の内容を提示した。調査後に見直してみると、まだ明瞭でないところや更に詳しい情報が必要と思われる点もある。これらについては再調査が必要であり、それは平成17年度以降の課題としたい。

### 3. サイタニー郡への移住

聞き取り調査で得られた情報によると、サイタニー郡への移住は、以下の3つの時期に大きく分けることができる。それぞれについて、以下、簡単にまとめて記しておく。

#### ① アメリカとの戦争の時代(ほぼ1960年代前半から1973年の「革命」まで)

・かなり遠方からの移住が起こった。特にシエンクワン県、サムヌア県など、北部からの移住が目立つ。この時期の移住は、新しく住む場所を探すために自発的に起こったのではなく、戦争の影響で行なわれたものである。

北方からではないが、パークサップ・マイ村も、戦争の影響で起こった移住によってつくられた村である。この村は、最初、1968年にカムムアン県から、アメリカ軍により移住させられた。戦争が終わったあとに、元のカムムアン県に戻った家族もあるし、サイタニー郡に残っている家族もいる。

・1970年にナムグム・ダム建設が始まった。ダムの北側の水没する場所に住んでいた人々は南側に移住することが必要となった。その時、政府は、山に住んでいたモン Hmong 族(ラーオ・スーンのカテゴリーに入っている)に対しても、山から平地に移住しないかと誘った。ポーンガム・ソーン(第2ポーンガム)村は、その時、1970年に、ダムの北側の山から移住したラーオ・スーン(モン族)の村落である。

#### ② 1973年の「革命」後から1990年代前半まで

・聞き取り調査によると、1973年の「革命」の後に部隊支援施設(?)の発展が始まるとともに、政府は、戦争のせいではなくなった人々を集めてウィエンチャンの周辺に集落を作らせるという方針をとるようになった。人々は、ウィエンチャン周辺の土地を開墾して水田を開いた。サイタニー郡では、ポーンサイ村は戦争時代にシエンクワン県から移住してきた人の村落であり、1975年に建てられた。政府から、一家族につき、5ライ ray の家を建てるための土地をもらった。一方、水田は自由に開墾することができた。

・おそらく1970年代前半には、ラーオ・スーンの人々の山からの移住が始まった。サイタニー郡では、二村落がラーオ・スーンであるモン族の村落である。調査で分かってきたのは、ラーオ・スーンが焼畑で稲を栽培するため、ラーオ・ルム(「低地の人」)の土地を借りるということである。その土地は、ラーオ・ルムが占有していた土地である。借りてから木を切って、稲作用の焼畑を作った。

それに加えて、いろいろな農業発展のためのプロジェクトも始まった。特に用水路プロジェクトは重要である。プロジェクトの開始により、換金作物を作ることも可能となった。

### ③ グローバリゼーション時代の開始から現在まで

1990年代に入ってから、地域全体の経済的・社会的な交流が始まった。首都のウィエンチャンは拡大した。いくつかの工場がウィエンチャン周辺に建てられた。ウィエンチャンの工場へ働きに行く、サイタニー郡からの若者や労働者が最近増えてきた。その工場の種類としては、家具、靴、縫製工場がほとんどである。土地の売買が増えてきたということも、調査で分かってきた。(調査者も、ドンマークカイ村の村長に「いい土地を持っているから買わないか」と誘われた。)

このような時代における移住については、他郡に住んでいる親戚がサイタニー郡に移住してくるので土地を安く売ってあげた、という事例が多く見られる。

## 4. 塩づくりとそれに伴う物々交換

2004年度の調査では、ドンクワイ村での塩づくりについてきくことができた。ドンクワイ村に塩を作りに来ていたのは、ドンクワイ、フアシアン、サーンフアボー Sang Hoa Boo、シンマノー Sim Manoo、クワイデー khwaay Daeng などの村人であった。塩作りは1、2、3月に行なわれた。塩を作ったのは売るためではなく、自分で食べたりパー・デークを作ったりするためであった。親戚が訪ねてくると、塩と魚・野菜・果物と交換した。塩を売ることもあったが、多くはなかった。

塩作りの準備には、以下のようなものがある。

- 1 マイセーン May Saeng という木を集めて縛る (ハーン haang と呼ばれる、木製の船形の入れものの中に敷くため)。
- 2 ハーンを修理する。特に、穴をきれいにふさぐ。
- 3 ゴン Ngon という、土を取るための道具を、竹を使って作る。塩を含んだ土はキーター Khii Thaa と呼ばれる。
- 4 ポム pom という、塩をすくいとるための道具を作る。
- 5 雨を防ぐための小屋を作る。

ここでは、1日あたり約2ムンの塩を作ることができる。1ムンは12キログラムである。売り値は1キログラムあたり20000キープである。

塩を作る場所にはピー phii (精霊)がいる。ピーの名前は、タオカムタン Thaaw Kham Tan とタオカムパン Thaaw Kham Pan だった。塩を作り始める前に、ピーに対する儀礼が行われた。儀礼はこの塩作りの広場で行なわれ、ドンクワイ村の村人だけではなく他の村の村人も参加しに来ていた。儀礼の時には、鶏一匹と酒一杯をピーにさし上げた。塩を作り始める日をその時に決めた。昔は人が沢山集まって、盛り上がる儀礼だった。20年前ぐらいから、政府の政策により、その儀礼は行なわれなくなった。

パー・デークを作るために、塩が使われた。パー・デークを作るため魚(小さいもの)は、マークヒヤウ Maak Hiew 川から取った。チョムヘット chom het 村、チョムジェーン chom chaeng 村の村人が、野菜、ナス、マレム(野菜の一種)を持ってきて、塩やパー・デークと交換していった。